

「21 世紀は山村の時代だ」 —清内路にみる原点回帰の自治—

地域政策プランナー 高橋寛治

1, はじめに——山村から未来を考える

私は、人口千人にも満たない小さな山村の再生を自らの仕事の間として歩んできた。飯田市役所を退職後、副町長として赴任した高野町では、高野山を取り巻く山村が急速に衰退していく現実を、目の当りにした。

かつて高野山では、山上の町と周辺の山村が互いに支え合いながら暮らしていた。山村の人々は農産物や薪炭を山上へ運び、山上は商業や信仰の中心として地域全体を支えた。都市と山村は対立する存在ではなく、循環する大きな共同体だったのである。

しかし、近代化とモータリゼーションは、この均衡を急速に崩した。都市への人口集中が進み、山村は過疎化と高齢化に直面した。その再生を模索するなかで、私は山村には、今なお豊かな可能性が残されていることを知ったのでした。

自然への畏敬、神仏への信仰、家族や共同体の深い結び付き、多様な技術を身につけた「篤農家」の存在。これらは単なる昔の生活様式ではない。変化の激しい現代社会だからこそ、人間が安心して生きるための基盤となる価値をつかんだのである。だから、二十一世紀は「山村の時代」であると考えている。

2, 近代化が失わせたもの

江戸時代の村は、「家」と「共同体」を基礎として営まれていた。農民も職人も商人も、それぞれが家業を持ち、家を次代へ受け継ぐことを当然として暮らしていた。

また自治の基本は「村寄り合い」である。村民全員が集まり、何日もかけて話し合い、一人でも反対者があれば結論を急がない。効率だけを考えれば非合理に見えるが、この全員同意の知恵こそが、共同体を分裂させることなく長く存続させてきたのである。

しかし、明治維新以降、日本は中央集権と近代化を急速に進めた。発展と成長を最優先する社会は、都市へ人・物・資本を集中させる一方で、地方や山村を周辺へ押しやっていた。戦後の高度経済成長は、その流れをさらに加速させた。便利さや豊かさを得る一方で、共同体、家族、家業といった社会の基盤は急速に失われたのであった。

1989 年、飯田市長を退任された松澤太郎氏から教えを受けたのは、これ以上成長のアクセルを踏み続ければ、ムラの破片さえ残らない、それには、あらゆる事業が「自治にかなうかを問い続けよ」という助言でした。この言葉は、私に近代化を問い直す大きな契機と

なった。

社会は発展した。しかし、その陰で、人々は帰る場所や支え合う関係を失い、孤立を深めている。私は、これから必要なのはさらなる加速ではなく、共同体の原点に向って「原点回帰の自治」を考えるようになった。

3, 歴史に学ぶということ

未来は過去の延長線上にしか生まれない。

しかし「新しいものは善であり、古いものは悪である」という発達史観は、日本各地の集落を切り捨ててきた。しかし、歴史を振り返ると、地方が主体性を失ったとき、国家や時代の大きな流れに翻弄されてきたことが分かる。

長野県南部の飯田・下伊那地域は、その典型的な例である。

戦前、この地域は全国でも突出して多くの満州移民を送り出した。繭価の暴落による経済的な困窮だけでは、この事実は説明できない。そこには、「国を支える」という強い使命感と地域の主体性があった。

しかし、その主体性は、結果として国家の拡張政策に深く組み込まれていった。

戦後もまた、その組織力は国策に協力する方向へ向けられ、道路整備や大型公共事業の誘致など、「外から地域を豊かにする」という発想が繰り返されてきた。

もちろん、社会資本の整備そのものを否定するものではない。しかし、それだけに地域の未来を委ねるならば、自ら考え、自ら暮らしをつくる力は失われてしまう。

いま求められているのは、「国が何をしてくれるか」ではなく、「自分たちはこの土地で、どのような暮らしを築くのか」という問いである。

4, 「中心」と「周縁」を問い直す

私たちは長い間、東京を政治や経済の中心と考え、地方を周辺として捉えてきた。

しかし、果たして本当にそうだろうか。

都会では便利さや豊かさを手に入れながらも、多くの人が地域とのつながりを持たず、自分の暮らす場所への愛着も希薄になっている。仕事の意味を見失い、人との関係も希薄なまま孤立する人は少なくない。

一方、山村には別の豊かさがある。

飯田市に隣接する清内路集落にはコンビニはない。しかし、人々は「隣の家がコンビニだから困らない」と笑う。足りないものがあれば近所で助け合い、困ったときには自然に支え合う。市場経済だけでは測ることのできない安心感が、そこには今も続いている。

もし、人間が安心して暮らせることを社会の中心的な価値と考えるならば、山村こそが

新しい時代の「中心」となり得る。

経済だけを尺度とする時代から、多様な価値を認め合う時代へ。その転換のなかで、山村は未来社会の一つの原型を示しているのである。

5、清内路に息づく「原点回帰の自治」

こうした近代社会の閉塞を考えると、私が最も注目してきたのが阿智村清内路集落である。

『清内路村史・民俗編』を開いてまず驚かされたのは、住民同士の関係の濃密さであった。風呂に呼び合い、茶飲みを日常とし、病気見舞いや冠婚葬祭はもちろん、屋根替えや井戸普請まで共同で支える。農作業では「手間替わり」によって互いの労働を助け合い、夏には出造り（居宅とは別の農作業の家）で寝泊まりしながら、そこでも新たな共同体まで形成していた。

そこには、人間関係の煩わしさもあった。境界をめぐる争いもあれば、火災への恐れから厳しい規律も生まれた。しかし、それらを含めて人々は地域に暮らし、互いの人生を支え合ってきたのである。便利さだけでは決して生まれない「生きる力」が、日々の営みのなかに育まれていた。

私が清内路で最も印象深く感じたのは、「丁寧な暮らし」が今なお息づいていることである。

ある女性は平日は勤めに出ながら、休日には苗を育て、美しく咲いた花を近所へ配って歩く。買い物はできるだけ地域のよろず屋を利用し、自宅の庭や畑も丹念に手入れする。そして、「私は丁寧な生活をしているだけです」と静かに語った。

この言葉には、経済効率だけでは測れない豊かさが凝縮されているように思う。大量生産や大量消費ではなく、自分の暮らしを自分の手で整え、人とのつながりを大切にする。その積み重ねが、地域の自立を支えているのである。

清内路では、「二十年後には食料とエネルギーを地域で自給できる集落を目指す」という構想も語られている。それは壮大な理想を一足飛びに実現しようとするものではない。

集落ごとに炭焼きを再び始めてみる。ヤギを飼ってみる。小さな共同作業を積み重ねながら、自給できる力を少しずつ育てていく。その過程そのものが共同体を強くし、人々の自治を育てていくのである。

6、私は、この営みを「総有」の思想で考えたい。

それは制度によって与えられる自治ではない。行政が設計する仕組みでもない。人々が自然と向き合い、助け合いながら暮らすなかで、自ら獲得してきた自治への回帰である。

この自治は、経済や行政の論理だけでは説明できない。総有の思想、すなわち暮らしをともに支えるという感覚によって保もたれている。

共有林のような大きな財産だけではない。家計を家族で支え、家を守り、祖先を祀り、次の世代へ受け継いでいく営みもまた、総有で出来あがっている証である。個人の利益だけを追い求める社会では、このような関係は不自由に映るかもしれない。しかし、この不自由さのなかにこそ、人間が孤立せずに生きるための知恵がある。

清内路の新年会にも、その精神はよく表れている。村人は酒や料理を持ち寄り、子どもから高齢者までが自然に集まり、それぞれが役割を担う。若い母親も子どもを連れて参加し、新しく移り住んだ人も気軽に輪へ加わる。誰かがもてなす側、誰かが客という関係ではなく、一人ひとりが場をつくる当事者なのである。

このように自治とは、会議や制度だけで成り立つものではない。日常の暮らしのなかで人と人とが結び付き、「この地域は自分たちで支える」という意識が育まれてこそ、本当の自治が生まれるのである。

7、おわりに――21世紀は山村の時代

都会では、「新しい連帯」とか「コミュニティ」がしばしば語られる。しかし、山村の現場で生きる人々にとって、それはいつでも参加し、いつでも離れることのできる緩やかな関係ではない。草刈りや除雪、祭りや葬儀、日々の助け合いなど、暮らしそのものを支える責任を分かち合う、重みのある関係である。

煩わしさや不自由さもある。しかし、その不自由さのなかにこそ、人を孤立させず、生きる安心を育む知恵が息づいている。自由とは、何ものにも縛られないことではなく、自ら納得できる関係のなかで生きることではないだろうか。

私は、「農」は生活スタイルであると考えている。農業を単なる産業として見れば、生産性や規模の競争に巻き込まれる。しかし、農的な暮らしとは、自然と向き合い、自らの手で生活をつくり、地域の人々と支え合う生き方である。それは、人間が経済のために生きるのではなく、経済を暮らしの道具として使うという、本来の姿を取り戻す営みにほかならない。

別の角度から見れば、二十一世紀を私は「開拓の時代」であると思っている。

開拓とは、未知の土地を拓くことだけを意味しない。それぞれの地域に眠る文化や風土、人と人との関係をもう一度掘り起こす原点回帰の営みである。土に触れ、木を育て、季節を感じながら、自らの手で暮らしを築くこと。その積み重ねが、人間の創造力を呼び覚まし、地域に新しい可能性を生み出していく。

ここで思い起こしたいのが、「挿し木」の姿である。

一本の枝は、親木から切り離されれば、生きるか枯れるかの境に立たされる。しかし、土に挿された枝は、自ら根を張り、新しい命として育っていく。その生命力は、自らの力だけではなく、土や水、光、周囲の環境との関係のなかで育まれる。

人間もまた同じである。私たちは、地域という風土のなかで人とつながり、自然と関わりながら、自ら判断し、生きる力を身につけていく。その関係性のなかで育まれる自治こそが、原点回帰の本質なのである。

近代化は、私たちに多くの豊かさをもたらした。しかし同時に、共同体や家族、風土との結び付きを弱め、人間を孤立へと向かわせた。その行き詰まりが見え始めた今、私たちは過去に学びながら、足元に残された知恵を耕し続けなくてはならない。

効率や競争だけでは測ることのできない価値を見つめ直し、人と自然、人と人が支え合う地域社会を育てていくこと。その挑戦の先にこそ、「生まれた地域で、安心して人生をまっとうできるむら」がある。

私は、その未来の原型が、清内路という山村の暮らしのなかに、静かに息づいていると信じている。

参考文献

内山 節 『清浄なる精神』 信濃毎日新聞社 2009 年 11 月 1 日

清内路村誌編集委員会『清内路村史』 清内路村史刊行会 1982 年 3 月 20 日